地域との絆が支える認知症ケア

グループホーム探訪
第38回 ～ようこそ、わが家へ～

芳枝さんが散歩から帰ってきた

グループホームの日常とニオイがある

今回のホーム

有限会社 ウェルフェア
グループホーム谷津苑

住所●千葉県習志野市秋津5-5-6
定員●9人（1ユニット）
代表取締役●田邉恒一

「グループホーム谷津苑」の玄関に、入居者の芳枝さん（96歳）が散歩から帰ってきた。カメラを向けるとポーズを取り、「撮影了解」ということ。芳江さんの要介護度は1で、1日に2回の散歩は欠かさない。入居5年来の習慣である。

当初は職員が心配して付き添った。何度も確認し、今では「行ってらっしゃい」と送り出す。芳江さんは、安全確保のために持っていったお守り（GPS）をグループホームのリビングで昼食の準備をする職員に、笑顔で手渡す。そして、流しに向かって野菜の皮剥きをしていた仲良しの入居者の節子さんに、「上手に剥けているわね」と話し掛けた。

グループホーム谷津苑のいつもの昼の風景である。

やがてロゼッタ保育園に発展

有限会社ウェルフェアの田邉恒一代表取締役（以下、田邉代表）にグループホーム谷津苑の開設の経緯を尋ねた。

田邉代表が介護の世界に入ったのは、父親と一緒に勤めていた不動産会社が介護事業への進出を図ったことに始まる。その不動産会社の社長の奥さんが認知症を発症してグループホームに入居。グループホームケアのよさを実感した社長が介護事業を立ち上げ、田邉代表にグループホーム開設準備を任せた。2000年のことであった。

田邉恒一代表取締役

地域で認知症の方を支えます

2003年には民家改修型の「グループホーム秋津（1ユニット9人）」を開設。翌2004年には、介護事業部を分社化して有限会社ウェルフェアとし、グループホーム谷津苑を開設した。

建物は、習志野市の谷津干潟近くの2階建ての社員寮を借り上げ、改修した。1階に「認知症対応型デイサービスセンター秋津」を併設。2階を1ユニット9人のグループホーム谷津苑とした。社員寮の個室がそのまま入居者の個室になった。廊下の2カ所の天窓から降り注ぐ太陽光線を活かし、壁紙は明るいオレンジ色を選んだ。

人材の確保では、先発したグループホーム秋津からの異動もあった。ただし、人材確保は永遠のテーマである。2008年、入社を希望する女性が面接で「介護の仕事をしたいけれど子どもが小さくて…」と話した。

田邉代表は、1階の浴室の広い脱衣所を改修。職員のための保育をスタートさせた。1日3人までの保育は、その後待機児童を抱える地域の母親からの要請を受けて、2010年には再度改修。スペースを広げ、認可外保育施設「保育ルームロゼッタ」へと発展。習志野市保育施設入所児童助成金の対象となった。現在で

は小規模保育事業所として、認可保育施設「ロゼッタ保育園」を稼動している。

地域に認知症理解の輪を広げる

田邉代表は畑違いの不動産業からの参入である。介護福祉士、介護支援専門員の資格取得後も学びを深めた。2009年には認知症介護研究・研修東京センターで認知症介護指導者養成研修を受講。「地域の人々に認知症の理解を得ることの重要性」を学んだ。

そこから生まれた目標は、「認知症サポーター養成講座」。認知症の理解者を育てることであった。自分のスキルアップを図るとともに社員の質も高めていくことを目指した。社員に声を掛け、キャラバンメイトを養成した。

田邉代表の地域への取組みはさらに進化する。2013年には、習志野市認知症メモリーウォーク実行委員会を立ち上げ、認知症メモリーウォークを開催。以後毎年、夏の市民祭りのパレードに参加している。

田邉代表は語る。「介護とは人と人のかかわりの中で生まれてくる仕事です。そのかかわりの中から、いろいろな取組みが出てきます。それが楽しみです」。

この考え方が、認知症サポーター養成講座、キャラバンメイトの育成、認知症メモリーウォーク、そし

2014年12月から高齢化が目立つ袖ケ浦団地内の集会場を借りて、毎月1回第3日曜日に開催する認知症「袖団カフェ」等の取組みに結実したといえる。

“笑顔で楽しく”がモットー／中村昌也ホーム長

皆で外出できる日を待ちます

中村昌也ホーム長は高校生の頃、イギリスに留学した。その時ドイツを旅して知り合った人が、介護施設のオーナーだった。3日間逗留して、仕事を手伝った。その経験が介護への思いとして残った。

しかし、大学卒業当時（1999年）の日本の介護の世界は、中村ホーム長の考える介護と違っていた。まずは、自分の苦手とする対人関係克服を目指し、営業の仕事を選び、10年。次にIT業界に3年。そして、心の底にあった“介護”へ向かうのである。

就職先を探した。“ウェルフェア”に巡り合った。20カ所の施設見学の後の入職であった。決め手は見学時のスタッフの“ホンワカ”とした雰囲気。ドイツの介護施設で感じたものと似ていた。30歳代に入っていた。ただし、大学時代にヘルパー2級は取っていた。

グループホーム谷津苑に配属になった。散歩も食事の用意も、利用者の生活に合わせて行われていた。その後、グループホーム秋津へ異動。4年後グループホーム谷津苑に戻った。1年で主任となり、2019年、秋津、谷津苑の両方のホーム長となった。

中村ホーム長にグループホーム谷津苑の現状を尋ねた。まず、入居者について。実は、2020年になって2人の入居者が亡くなった。一人は谷津苑で看取り、一人は誤嚥性肺炎のため病院で亡くなった。したがって、現在の入居者は男性1人女性6人の計7人。平均年齢は88.4歳。90歳以上も3人いる。要介護度は、要介護1が2人、要介護2が3人、要介護3と5が1人ずつ。車いすの使用は2人である。

一方、職員は中村ホーム長を含めて、常勤は、男性2人、女性2人。3人が介護福祉士である。パート職員は、女性5人（介護福祉士2人、介護職3人）。非常勤の看護師が医療面を固めている。

谷津苑の入居者は、自室で自由に過ごす時間が多い。ただし、10時のお茶、12時の昼食、3時のおやつが、自然の見守りとなっている。中村ホーム長は、今後の方向として、ご利用者を誘って、さらに積極的に散歩や外食に出かけたいと語った。

事業所内保育所に背中を押されて／田本華代さん

ケアマネジャーを目指します

田本華代さんは2015年6月にウェルフェアに入職した。専門学校で社会福祉主事の資格を取り、病院で看護助手を務め、有料老人ホーム勤務の経験もあった。ウェルフェアを選んだのは、子どもが8カ月になり、そろそろ仕事をしたいと考えたから。子どもを預けて安心して働ける職場であることが条件であった。

ウェルフェアには、社内保育ルームがあった。また、家からも近い。入社当時は週2～3回、午前中のパート勤務とした。その後、子どもの成長に合わせて勤務時間を長くして、2年目に正社員となった。

介護のスキルアップを目指した。実務者研修を受け、さらに田邉代表の勧めもあり、勤務が休みの日に喀痰吸引の研修を受けて、2号の資格を取得した。2019年には、介護福祉士の資格も取得している。

グループホームでのイチゴ狩り

本物のイチゴ畑みたい！

「今度一緒に歩こう」ね

さか立ち！

こんな顔できるよ！

喀痰吸引はそれほど頻繁でないにせよ、「痰が絡んでいるみたい。だからお願い」と声が掛かる。田本さんは「資格を取ってよかった」と実感している。

さらに、田本さんは「大勢を対象とした介護は、時間に追われます。ここはご利用者に寄り添い、ご利用者のリズムに合わせて介護の気持ちを発揮できます。現在はコロナの影響で、全員そろっての外出はひかえていますが、早く状況が変わって、皆さんと外出したいと思います」と語る。

今年のイチゴ狩りは、グループホームのホールにプラスチックのケースにスポンジを敷いてイチゴ畑をつくった。本物のイチゴをスポンジにさしてイチゴ畑に見立てた。入居者に笑顔が広がった。

田本さんの今後の目標は、ケアマネジャーの資格を取ること。ウェルフェアとともに育てた息子さんは、来年小学生になる。

認知症サポーター養成講座に工夫／田原吉規さん

街で「先生」と声をかけられるとうれしい

田原吉規主任はスポーツトレーナーの養成校に進んだ。新聞配達をしながらの通学である。新聞代の集金に各家庭に行くと、在宅のお年寄りが田原さんを待っていた。話をするのを楽しみにしていた。お年寄りの話を聞くのは苦ではなかった。養成校を辞めて、有料老人ホームに勤めるようになった。介護福祉士の資格も取った。

ある時、テレビにグループホームの特集が映し出された。心が動いた。ウェルフェアの募集が目にとまった。2009年に入職。グループホーム秋津に配属された。グループホーム谷津苑にも助っ人にきた。2019年デイサービスセンター秋津に異動、現在に至る。

グループホームの日々の感想を田原さんは次のように語る。「時間の縛りがないのが新鮮でした。また、皆で花見に行った時、入居者と社員が全く自由に屋台で買い物をしているのを見て、社員と入居者が一緒に生活していることを実感しました」

認知症介護に取り組む中で、田原主任は、その明るい性格と会話のテンポにより、田邉代表に指名され、認知症サポーター養成講座の講師への道を歩くことになる。研修を受け、キャラバンメイトとなった後は、小・中・高生や地域の人たちに、「認知症の人と家族が安心して暮らせる地域づくり」について理解してもらえるよう試行錯誤した。

講座には5～60人が参加する。難しかったのは、「90分の講義時間の壁」である。眠くならないよう、どのように講座をリードするか。小・中・高・一般の人向けに、自分で教科書をつくった。間の取り方、伝わりやすさ、目線、体験の組み合わせなど、工夫した。寸劇も織り交ぜた。

習志野市では、小・中・高生への認知症サポーターの講習は、秋に福祉体験学習として行う。しかし、今年はまだ未定である。

口コミで広がった保育園の輪

認知症の偏見もなくなりました

ロゼッタ保育園の澤田慶子園長（保育士）は12年前から保育所の開設にかかわった。当時2歳と4歳の子の母であった。ウェルフェアの社員となって保育所運営にも力が入った。

澤田園長は「ロゼッタ保育園の発展と認知症に対する地域の人の理解の深まりが軌を同じくしているように感じます。一人二人と子どもさんを預かるうちに地域に口コミで保育園の存在が広がっていきました。認知症への偏見も自然となくなりました」と振り返る。

保育園の子どもたちを散歩に連れていくと、遠くからでも地域の主婦から声が掛かる。グループホーム谷津苑と地域の絆は、“コロナ”を越えて、強く結ばれている。

（取材／谷口　要）